

目的 肩部は上半身衣服の支持帯として頸部や胸・背部また上腕部の形態と深くかかわりながら、被服構成上最も人体との適合性が問われる重要な部位であり、人体の立体性から考えて体幹部の上面をあらわす肩傾斜複曲面としての把握が必要であると考え。そこで、モアレ法により肩部と胸・背部から上腕部にかけての曲面状態をとらえ、肩稜部における複曲面構造や腕付根線および上腕部の形態について個体差による形態分類を行うとともに、これらの有機的関連を追求し肩部の支帯部、いわゆる肩の厚みについて検討した。

方法 実験はモアレトポグラフィカメラFM-80を用いた。撮影は人体の前面、後面、側面、前斜(45°)および肩部上面の5方向より行った。被検者は青年女子50名で、体表には主要計測点の他に頸付根線、腕付根線を印し、肩部上面では肩稜部を明確にするための仮線を添付した。すなわち、頸側点と肩峰点とを結ぶ直線A、肩峰点と上腕骨頭点間の距離をAと平行にとった線B、Cである。そして、モアレ縞より各部位における断面形状を求め展開図を得た。

結果 肩部形状の背面シルエットは仮線A、Cの断面形状の交錯によって形成されることが解り、矢状方向における断面形状では仮線A、C間(人体前面側)よりも、A、B間(人体後面側)の変化が大きいことが認められた。また、肩稜部における上腕骨頭部突出による彎曲の状態は5分類でき、前・後腋点間の矢状面に対する角度とは高い相関性が認められ、腕付根線形状とも深いかかわりがあることが明らかとなった。これらのことより、肩部の支帯部設定への手がかりが得られたと考える。